



2011東京aaca景観シンポジウム 「東京の都市景観を考える」

(10月21日開催予定)

CG提供：東武タワースカイツリー株式会社

CONTENTS

平成23年度 通常総会		2
通常総会 特別講演	松隈 章	3
東日本会員レポート	本間利雄 伊藤公象 清水公夫	4~6
第五回 卯月展		7
時代の華一輪	神谷ふじ子	8
東日本大震災 「芸術環境復興預金」へ募金のお願い		
第175回 AACAFォーラム	大成 浩	9
TPOICS		
第一回AACAF展		10・11
理事会報告・新入会員/会員の移動		12

2011年9月

社 団 法 人
日 本 建 築 美 術 工 芸 協 会

平成23年度通常総会

平成23年度通常総会は、6月15日(水)午後5時30分より、建築会館大ホールにて、会員275名(出席68名、議決権行使書提出90名、委任状提出117名)の出席を得て開催されました。

定款23条の定めに従い中島昌信会長が議長に指名され審議を開始致しました。まず議長より議事録署名人として出席会員から瀬川秀之・佐藤静子会員の2名を指名し満場一致にて選任された。

第一号議案 平成22年度事業報告に関する件、第二号議案 平成22年度収支計算書等に関する件については、事務局長より報告及び説明、監事より監査報告があり、議長採決にて満場一致にて承認された。特に22年度収支計算書における決算においては、念願でありました借受金の完済、退職給付引当金の所要額の積立が完了し、経理面での問題が整理され、一般社団法人への移行における障害が解消されました。

第三号議案 一般社団法人移行に伴う定款に関する件については、法人制度改革に伴う特例民法法人から一般社団法人への移行申請手続きを行うことに際し、新たな定款案の提示を内閣府大臣官房公益法人行政担当室から求められている定款案の承認を要するため総務委員長より提案説明があり議長採決により満場一致にて承認された。第四号議案 長期会費滞納会員の取り扱いに関する件は、

定款11号の定めにより3年継続して会費を滞納した会員に対し、会員資格継続確認手続きに対し回答の無かった会員を除名とすることについて、議長より採決が求められ満場一致にて承認された。

第五号議案 平成23・24年度 理事・監事選任に関する件、は議長より提案説明があり原案通り賛成多数により可決され次ぎの方々が選任されました。(敬称略)

理事 重任 芦原太郎：芦原太郎建築設計事務所所長

宇津野和俊：菊川工業(株)会長

岡 房信：三井不動産アーキテクチャル・インテグレーション(株)会長

岡本 賢：(株)久米設計特別顧問

加藤貞雄：美術評論家

佐野吉彦：(株)安井建築設計事務所社長

中島昌信：建築家

日高草也：(学)日本大学生産工学部

六鹿正治：(株)日本設計社長

山崎輝子：皮革工芸家

新任 城之下 洋：TOTO(株)コミュニケーション本部本部長

監事 重任 飯野毅一：美術コンサルタント

岩井光男：(株)三菱地所設計副社長執行役員

大野 勝：(株)佐藤総合計画専務執行役員

尾崎 勝：鹿島建設(株)常務執行役員

可児才介：可児アトリエ主宰

澄川喜一：彫刻家

中村光男：(株)日建設計会長

村松映一：(株)村松映一建築計画室主宰

安河内敦子：(株)意匠計画代表

石田真人：事務局長

中島三枝子：画廊るたん代表

以上 20名

以上 2名



以上すべての議案の審議は終了し、平成23年度通常総会は滞りなく終了した。

総会終了後、10月21日開催の「2011東京aaca景観シンポジウム」について、岡実行委員長より案内と集客のお願い、また7月1日予定の175回AACA フォーラムについて、中村フォーラム委員会副委員長より講師の紹介が行われました。

さらに、(株)竹中工務店設計本部 松隈 章氏により「バシブデザインの先駆け 聴竹居」の特別講演が行われ、大正から昭和初期の建築家藤井厚二の活躍に感銘を受けました。また会員交流会も盛大に開かれました。

中島会長挨拶

本日はご多忙の中、通常総会へ多数ご出席いただきまして誠に有難うございます。まず3月16日に予定しておりました平成23年度予算総会は、発生いたしました東日本大震災の為開催を断念せざる事となり、審議予定の平成23年度事業計画、収支予算書、一般社団法人への移行手続きの開始の三議案について総会承認手続きを得ることができませんでした。

やむなく会員の皆様に対し議決権行使書による採決を求めましたところ、会員総数398名の内 251名の賛成を得て承認を戴き、さらにその結果を理事会にて理事全員の承認により議案が成立いたしました事をまずご報告いたします。

さて本日の通常総会におきましては、議案書にあります通り、22年度事業報告及び決算報告の審議、内閣府公益法人行政担当室との手続き開始のため、当協会の定款変更案の審議、さらに平成23・24年度協会理事・監事の選任が主な議案となっております。ご審議のほど宜しくお願い申し上げます。また今回の大震災により文化財の被害も多く、被災したそれぞれの町や村には長い歴史と文化の特質があります。現在はハード中心の復興が急務ですが「いかにして文化を後世に伝えるか」はまさに当協会の務めであると考えます。これからの協会活動によりその役割を果たしてゆく所存であります。

「パッシブデザインの先駆け 聴竹居」



松隈 章
 (株)竹中工務店設計本部
 東京建築士会会員
 日本建築美術工芸協会法人会員

時代の先を駆け抜けた住宅作家 藤井厚二

藤井厚二は明治21年広島県福山市の造り酒屋の次男として生まれる。藤井家は家業を営むかたわら円山応挙、竹内栖鳳などの第一級の絵画、書、茶道具を数多く所蔵し、藤井は幼少の頃から日常的に目にしていた。建築家の藤井の鋭い審美眼は海と山に囲まれた自然環境と恵まれた家庭環境により育っていった。大正2年東京帝国大学工科大学建築科を卒業した。在学中、日本初の建築史家で「平安神宮」「築地本願寺」を設計した伊藤忠太の教えを受け西洋化一辺倒から脱し、日本独自の建築様式を生涯追い求めた伊藤の思想に大きく影響を受けている。

当時、設計技術の近代化を急いでいた竹中工務店初の帝大卒設計課員として入社、大阪朝日新聞社村山龍平郎などで手腕を発揮した。

5つの“実験住宅”自ら興し理論化した環境工学

藤井は恵まれた財力を生かし自邸を5つの“実験住宅”として建てている。大正8年竹中工務店を退社し“建築に関する諸設備および住宅研究”の為欧米を視察、欧米のモダニズムデザインの萌芽と最先端の建築設備に触れ影響を受けた。帰国後京都府大山崎町に約1万2千坪もの土地を購入し「第二回住宅」を建て移り住む。日本の伝統的な住まいで、経験的に行われてきた日本の気候風土に合わせる建築方法を科学的な目で捉え直す事が藤井の大きなテーマとなった。自ら着目し理論化した環境工学の知見を設計に盛り込み、居住・実証し、改善を加えながら、実験住宅を建てていったのである。

木舞壁・2階建ての「第三回住宅」(大正11年)、土蔵壁・平屋建ての「第四回住宅」(大正13年)、そして最後に木舞壁の上に土を塗り、クリーム色の漆喰で仕上げた平屋建ての「第五回住宅(聴竹居)」。



— 建築家 藤井厚二 —



(客室)

終生追い求めた“日本の住宅”の近代化

—洋風でもなく、和風でもなく

今からちょうど80年前に建てられた「聴竹居(第五回住宅)」は時代を超え、いつの時代にも評価される“日本の住宅”としての普遍性を備えている。

藤井は竹中工務店時代も含め、25年間に50を超える建物を設計している。その大部分が住宅だ。

昭和12年に完成した京都の中田邸(扇葉荘)が遺作となる。昭和13年没、京都嵯峨野の二尊院にある自ら病床でデザインした墓所に眠っている。

完成形とした「聴竹居」に住んでわずか10年の短い生涯であった。

今年、没後70年を迎える藤井の残した“生き続ける建築”は、そのほとんどが個人住宅であるため小さくて目立たない。しかし「其の国の建築を代表するものは住宅建築である」として生涯、日本の住宅の理想を求めたその意志の持つ現代的な意味は、極めて大きい。環境がますます大きなテーマとなってきた21世紀に生きる我々にとって藤井の住宅とそこに込めた思想をくみ取ることの重要性は増すばかりである。

イタリアの哲学者であり、歴史学者でもあるクローチェは「すべての歴史は現代史である」と述べている。歴史を描くということは過去を語ると同時に現代に生きる人々にとってもその意味を問うことであり、でき得れば未来への展望を示すことだ。

藤井の“日本の住宅”＝“生き続ける建築”を見つめることは、まさにそこに続いている。

(文：INAX REPORT No.173 松隈 章著抜粋)

(写真提供：(株)竹中工務店)

東日本大震災と、建築家は——いま我々は何を学ぶか



本間利雄

本間利雄設計事務所
日本建築美術工芸協会会員
美しい国づくり協会理事
日本建築家協会名誉会員

平成23年3月11日午後2時46分、東北地方太平洋沖でマグニチュード9.0の巨大地震が発生。

テレビでは世界の終わりを思わせるようなニュースを次々と伝えていた。広範な沿岸地域を襲う津波や、福島第一原子力発電所の事故。どうしたものかと途方に暮れてしまった。

後日、仙台空港まで車を走らせることができることを確認して、山形から仙台、そして石巻までの一帯の被災状況を見て回った。突然降りかかるからこそ天災なのだが、前もって防ぐ手立てはなかったのかと痛感した。事務所の地域環境計画研究室のスタッフから1100年前の貞観地震のこと、或いは先人の教えを守って高台に集落を形成した事例などを聞き及び、自然の底力をいまさらながらに知らされるとともに、自然に対する謙虚さをいつの間にか忘れてしまったのではないかと思うに至った。

自然とともに生きてきた先人たち。日本列島の諸々の自然災害と隣り合わせに生きてきた日本民族。今生きているその恩恵は神によってもたらされたものだ。そのような中で、私は師と呼ぶべきお二人を改めて思い出していた。

おひとりにはイアン・マクハーグ先生。今から37年前、エコロジカル・プランニング（地域生態計画）の権威である彼が山形にお見えになられた。当時整備計画が進められていた米沢市の八幡原工業団地について、地域整備公園よりその現地調査を依頼されたことだ。彼はエコロジカル・プランニングの考え方に沿って、現地を視察し、意見を述べた。

最上川は吾妻山を源流に山形県内を縦断し、酒田市の河口から日本海へ注ぐ。流路延長229km。

一つの県を流域とする河川として国内最長で、流域面積7,040km²は県土の76%を占める。

豊かな農業、奥深い生活文化を育んだ山形の大切な河川だ。「河川は曲がっているべきだ。道路は自然の地形を大切に、改造は最小限に」「日本初の内陸型工業団地が最上川の上流域にあることを忘れてはいけない。源流が汚染されれば、最上川に生きてきた山形県民の田園地帯全体に汚染が広がり、米どころ山形はどうなるかを考えるべきだ」と。

そして現地で上空にトビが輪を描くように飛ぶのを見て、「いつまでもトビが飛んでいるような開発であるべきだ。本来 日本民族は自然と共にデザインし、自然と共に生き、世界有数の美しい景観を創り上げてきたのだから」と。

さらに拙宅の庭を見て、「どうして塀で囲み、自分だけで楽しむ庭をつくるのか。もっと隣のことを考えるべきではないか」と叱咤されたことは特に鮮明に記憶に残っている。

建築家は当然周辺のことを考えるが、ともすると与えられた敷地の中をどう有効に生かそうかと、それだけに終始してしまいがちだ。大きく捉えなければならないのに、その場で小さく小さく委縮してしまう。彼の考えを聞き、私は改めて建築家として多くのことを学んだ。建築家は大いに反省するとともに、各専門家と共同しあい、住まい手・使い手と協調しながら日本列島すみすみまで質の高い建築を創りあげなければならない。安全な美(うま)し国づくりのために。

もうお一人は、鈴木弼美(すすき すけよし、1899～1990年)先生だ。私の故郷だが、新潟県と境を分かち飯豊連峰(最高峰は大日岳2,128m)の山麓の雪深い辺鄙なところに小さな高校・基督教独立学園がある。日本の思想史に大きな影響を与えた内村鑑三(1861～1930年)の愛弟子の鈴木先生が創立した。情報をカットし、真の人間としての教育を目ざして全寮制としている。

美しい自然との接触によって感受性が豊かになり、厳しい自然の中の生活によって忍耐力・精神力が養われる。人間という個を大切にしている場である。その校舎の壁面には『神を恐るるは学問のはじめ』と、ヘブライ語と日本語で書かれている。このたびの災害で自然の恐ろしさ、神の恐ろしさを知らされたような気がするが、「私たちは何の為に生きるのか」と、再び問いかけられているのは明白だ。

建築家・芦原義信先生が山形にお出でになった時、発足したばかりの日本建築美術工芸協会についてお話をいただき、入会することになった。多様なアーティストがコラボレートする会は、一つの専門団体でありながらも、垣根を越えてデザインの知を求め合い、交流しあう団体として、独特の雰囲気がある。建築に係る芸術的環境の創造と我が国の文化向上のために寄与する団体として、その特質を十分に生かし、じっくりと被災地への支援・復興の活動を展開していただければと切に願っている。

註：イアン・マクハーグ (Ian L. McHarg, 1920～2001年)
アメリカの造園学者、ランドスケープアーキテクト。
ペンシルベニア大学ランドスケープアーキテクチャ。
地域計画学部の創立者でペンシルベニア大学名誉教授。
環境デザイン分野でエコロジカル・プランニングの方法論を確立する「Design with Nature」の著作者。

地表の襲 ー再び波立つプールにー



伊藤公象

陶芸家

日本建築美術工芸協会会員

茨城県の陶芸地笠間市郊外の里山の裾にアトリエを造って約40年になる。この地で震度3、4の地震には慣れっこで“あっ地震”と家族が目を合わすくらい。だが今度は違った。尋常でない強震に戸外へ飛び出し、繰り返される強い余震に立ち尽くす。と、“あれは何だ。”周囲の連なった里山の山裾から煙のようなものが吹き上がり、山並みを覆いつくす。山崩れが家屋の倒壊かと目を凝らす。だが地震で杉林が大揺れ、花粉が一斉に舞い上がったものだと思った驚き、そしてアトリエに一步足を踏み入れると、そこでも今まで見たことが無い光景が。

窯場のガス炉は大破、電気炉は3基とも横向き、焼成用の棚板が束になって割れ散っている。スレート壁には大きな亀裂が走り、壁から落ちた参考作品の破片は散乱、建物の大ガラスが二階から落ちて木端微塵である。約40年間生活を共にしてきたアトリエの惨状に茫然自失、言葉も出ない。我に返ると停電でテレビ、ラジオはだめ、唯一携帯ラジオが情報源。家族皆で懐中電灯や蠟燭の明かりを囲み、灯油ストーブで残量を気にしながら冬の身支度で暖をとり、ただただ電気がくるのを待ち望む。今思えば、あの光景を切り取るとアートのパフォーマンスになりはしないか。

そしてガソリンや食べ物の不自由を強いられた生活は、65年も前の遠い記憶に向けられた。終戦直前の昭和19年、学童疎開先の温泉宿で、湯上りの日課だったシラミ潰し。裸電球に下着の縫い目をかざし、左右の親指の爪で我が血を吸ったシラミを潰す。いくら潰しても翌日にはきらりと鈍く光るものがうごめく。その情景は今もパントマイムのように演じることができる。その翌年、「広島に新型爆弾が投下された模様・・・」とラジオの大本営発表、そして昭和天皇の玉音放送で終戦を迎えた。

日常の意味を切り取るアート感覚からは、上記のパントマイムやパフォーマンスは古今を巡るようだ。

目に見える核のきのこ雲、目に見えない放射能、どちらも死を予兆する。目に見えないモノ作りをする作家として、エネルギーとアートについて反芻する時間が多くなった。

3日後ようやく電気がきて、テレビの映像からは目を覆うような大津波の惨状が繰り返し放映されている。我家の被害などはその比ではない。

今年の9月17日(土)から12月18日(日)まで富山県入善町下山(にざやま)芸術の森「発電所美術館」で私の個展が企画されている。大正15年に北陸電力によって建設され、老朽化した水力発電所跡を、直径3mの導水管や発電用タービンをそのまま残した異空間の美術館で、現代美術の企画展開催で知名度は高い。個展の表題を「地表の襲 ー再び波立つプールにー」としたのは、1996年、富山県立近代美術館での個展「土の地平・伊藤公象展一人為と自然の間にー」で、(あるいは波立つプール)とサブタイトルを付けた社会的な時代背景とオーバーラップさせている。その前年の1995年には阪神・淡路大震災が発生。地下鉄サリン事件による社会騒乱、そして中国、フランスでの核実験再開があった。個展の図録に「・・・穏やかなものから波立つものへ。緩急の繰り返し集散する波状は自然界のものだけでなく人間社会にも当てはまる。好ましい波状を持続し得る保証は無い。暴風雨に支配されるかのような穏やかでない波状、愛や平和の求めに対しての乱調なそれを、諦めと祈りを交えて眺めるだけなのか・・・」と記した。

あれから15・6年が過ぎた今回の個展での「再び波立つプール」は大地震に大津波、加えて放射能にさらされる危機感によるが、それだけではない。

大宇宙の美しい星の地球上で、戦争や飢餓はその終息を見ないし、さらなる大災害の危機も伝えられる。

「地の襲が荒立つ」そのようなプール(溜まり場)に、それでもエロス(生氣)溢れる「愛の和やかな襲」を再び、と願う。

放射能による 奇妙な緊張感の中で



清水公夫

(株)清水公夫研究所
日本建築美術工芸協会会員
日本建築家協会会員
日本建築学会会員

地震、津波に続いて起きた原発事故は、福島県だけではなく日本全体に重くのしかかっています。事故後6ヶ月経っても放射線量はそれほど下がらず、日々の生活に影響を与えています。

事故直後、野菜、魚、肉など生活に必要とする食物が放射能汚染で「福島県産」というだけで敬遠され、生産者の不安を増しておりましたが、最近の報道は東北、関東圏まで広がり、食に対する消費者からの不安も増えています。

福島県は太平洋に面した浜通りと国道4号線、東北新幹線が走る中通りと会津地方の3つの地域があります。東京電力福島第一原子力発電所は浜通りにあり、20キロ圏内の市町村は立入りが禁止され、すべての住民は圏外に避難外に避難しています。私の住んでいる郡山市は50~60キロ離れていますが、放射線量は高く、年間に浴びる放射線量が問題になっています。特に子供たちへの影響が心配されていますが、専門家の意見はまちまちで、何が正しいのか判断することは出来ません。この大事故は我々の生活、産業に様々な課題を突きつけています。

被害にあった宮城県、岩手県の復旧、復興の進め方はインフラを復旧し、人々の生活の出来る居住環境、産業基盤を整備することを計画の軸に据えています。福島県の場合は状況が異なり、立入りが禁止されている住民は県内や県外に避難し、行政の組織も分散して避難住民の多い地域に役場機能を移し、行政を行っています。このような状況は県全体の過疎化と高齢化を一段と加速し、人口は減少すると考えられます。復旧、復興という考え方ではなく、新しい構想で「再生」という計画が必要です。

原発事故直後から早急に避難者のための仮設住宅の建設が計画され、福島県はプレハブによる仮設住宅に加え、県産の木材を活用した仮設住宅をつくることになりました。建築家集団のJIA福島地域会も良質な居住環境の木造による仮設住宅を提案し建設中です。他にも出来ることに積極的に参加しています。

当地で設計事務所を始めて三十年以上になります。雪の多い会津地方の仕事が多く、山々に囲まれ、田畑が広がる「中山間地帯」と呼ばれる美しい風景の所です。過疎化により統合する学校や幼児施設を木の特性を活かした「木」をテーマにして、木造の建物や外装内装に使用した建物を設計してきました。

この地方は原発事故による放射能の影響は受けていないのですが、風評により食料の野菜や果物など敬遠され、観光客も激減し、観光産業にも影響しています。福島県全体が放射能で汚染されているように思われています。

一人一人の住民の中には、こういう地域にしたいという希望の種があります。いろいろ異なった情報を持った人たちと緩やかに繋がることで、新しい生活の場を再生させる考えが生まれると思います。

希望の種を育てる緩やかな絆の一つとして「アート」での支援かもしれません。「人はパンのみで生きるにあらず」です。娯楽も必要でしょう。

一瞬の癒しで慰められることは多くあります。

しかし同時に知的な癒しを求めるのも人間です。

「アート」はそれを担っていると思います。

継続する娯楽はありませんが、継続する癒しは「アートの世界」にあります。

今までもそうでしたが、社会、政治の関心は移ろいやすいものです。今は原発の事故も含めて、震災の報道も多いですが、原発事故が一定の収束を見せれば、震災全体のニュースバリューは次第に下がります。でも被災地の人たちにとって、原発事故の収束の目処が立たない状況では安心して住める地域づくりは、長い年月がかかります。

- 一 悲観主義者はあらゆるチャンスに困難を見つけるが、楽観主義者はあらゆる困難にチャンスを見出すー
ウィンストン・チャーチル

長い年月に打ち勝つには悲観ばかりしては行けません。あらゆる困難をチャンスと考える精神力が必要なときです。

今年も建築会館にて4月（卯月）に女性作家による展示会が 4月4日から10日まで開催されました。五回(5年)シリーズを「起・承・転・結」の明快なシナリオとその回ごとに、こだわりのコンセプトで展開し企画展示を行って、今年が「結」にあたる最後の展示会となりました。

2011第五回卯月展テーマ 「 ー未来へつなぐー 」



野口真理



内田滋子



渡邊たまえ



片岡雅子



山崎輝子



鮫島貴子



中村弘子



佐藤静子



内田滋子



野口真理



佐藤静子



鮫島貴子



山崎輝子



渡邊たまえ

「永遠のミケランジェロ」



神谷ふじ子

彫刻家

日本美術家連盟会員

日本建築美術工芸協会会員

彫刻を続けてきて思うことは、作家は古今東西数多いが、長い美術史の中でミケランジェロがその頂点にいる人だという確信だ。

その作品がロンドン二の「ピエタ」ではないか。

この空前絶後の作品に私は深い感銘を受ける。

ミケランジェロは1564年に89歳で亡くなるが、この作品はその5年前の85歳から制作を始め、死の数日前まで彫っていたという。

ミケランジェロの最晩年の作品だが造形を超えた精神の世界がここにはある。肩と腕を切り離すことでそこに空間をつくり、そのことによってこの作品は更なる未完の思惟性と永遠性を与えられた。

彫刻をやってきて、ミケランジェロの偉大さを少しでも知ったことが、私にとって一番の収穫とと思っている。

私はミケランジェロを仰ぎみながら、常に作品の良し悪しを考え制作してゆく姿勢をこれからも持ちつづげたい。

私の作品は銅板を腐食させてそれに緑青をふかせたものと七宝焼とで構成されている。

銅の腐食は銅版画と同じ技法で銅板にグラウンド液を塗り、それを引っ掻いたものを第二塩化鉄液に浸けて銅板を溶かして穴が開くまで腐食させる。

そしてその表面を洗って日に干して緑青液を塗ることを繰り返す。ひと月程すると美しい緑青がふいてくる。もう一つの素材として、銅板に発色を良くする為に糖漿の間に銀箔を入れて800℃の電気炉で焼成する。そして出来たものと緑青板を組み合わせることで立体又はレリーフの作品に構成する。七宝は工芸だが銅板と組み合わせることで、純粋アートである彫刻として私は制作してきたのだ。

銅の腐食によって時の経過と脆さを、七宝の輝きによって生命を表現している。

私は時が経過したものに心引かれる。原始から上古、そして現代、未来へ。

時間は何処まで流れていくのか。朽ちかけて佇むその姿は時の変遷に洗われた究極の造形である。

それは次の時代に伝える命でもある。

<輪廻> その思いを作品に込めて私は制作する。



「門」

(68×114×180cm)

東日本大震災「芸術環境復興預金」へ募金のお願い

協会ではこの度の東日本大震災により、逸失してしまいました地域の文化や街並みの復興のため、復興預金を積立て毎年度末にその目的実行の為に寄付を行うことになりました。復興にはかなりの時間を要する事と考えられますが、その一助となることを協会の目的に加えしました。協会は今後実施いたします諸活動において募金を実施して参ります。会員の皆様には芸術活動やチャリティー活動等による売上の一部でも募金に充て、復興の一助として下さい。

復興預金口座は下記に記載いたしました。会員の皆様のご支援をお願い致します。

ゆうちょ銀行 港芝五支店 当座預金 口座名： AACCA芸術環境復興預金口座
店番： 019 口座番号： 0338383

大成 浩 「私の彫刻作法」



大成 浩

彫刻家

日本美術連盟理事

日本建築美術工芸協会会員

第175回フォーラム「大成 浩-私の彫刻作法-」が、7月1日建築会館にて開かれました。

大成氏は、モニュメント「風の地平線・蜃気楼」で、一昨年日本建築美術工芸協会AACAA賞優秀賞を受賞されました。中村フォーラム委員の司会后、大成氏のおおらかで温かいお人柄を感じるお話が始まりました。富山県立近代美術館での個展など紹介した富山テレビ制作のビデオ「風の彫刻家」を資料として見た後、氏の石彫への熱い思いが披露されました。印象深かったことは、作家はひとりではなれない 彫刻家の場合、特に他者の指一本また両手で助けてもらって作家となる。氏の周りの方々との強い繋がりを感したことです。

50年の石彫作家活動以外に彫刻シンポジウムを八王子市や関ヶ原町などで企画され、彫刻を都市とどうマッチさせるかを公に提言されています。



風の地平線・蜃気楼

氏の作品「風の地平線・蜃気楼」は光と形の共振現象で起こる詩、動かない石の中に見える風という悠久の時間が織りなす詩なのです。

石に魅せられた氏の表現者としての話は参加者を感動の渦にまきこみました。また質疑応答では中島会長、加藤副会長はじめ参加者による、日本の芸術文化の未来への提言も続出し、意味深い一日でした。

(aacaフォーラム委員 村松勢津子)

TOPICS

・2011東京 aaca景観シンポジウム「東京の景観を考える」ご案内 シンポジウム実行委員会

日 時：2011年10月21日（金曜日）午後14時～
場 所：パナソニック電工 汐留ビル 5階イベントホール
5階イベントホール（汐留シオサイト）

定 員：300名

参加費：シンポジウム+交流会 8,000円

：シンポジウムのみ 5,000円

参加締切：9月21日（水）先着順

参加申し込み用紙は事務局又はWebサイトまで

第一部 鼎談「東京の景観・その魅力」

澄川喜一・陣内秀信・中村光男

第二部 パネルディスカッション「水辺を生かす街づくり」

コーディネーター 陣内秀信

コメンテーター 高橋栄一

パネリスト 福水正徳(東武外-スイツリ-株)

新原昇平(三井不動産株)

遊佐謙太郎(三菱地所株)

・平成23年度 第二・三回AACAA展 出展作品募集のご案内 展覧会委員会

今秋、下記の日程で第二回・第三回AACAA展を開催いたします。会員の皆様の作品紹介展となります。ご参加ください。

第二回AACAA展

平成23年10月20日(木)～27日(木)

第三回AACAA展

平成23年10月28日(木)～11月2日(木)

会 場：建築会館ギャラリー・公開広場

参加料：会員 10,000円 一般 15,000円

応募締切：10月3日(月) 先着順

応募要項・応募用紙等は事務局又はWebサイトまで

- ・作品分野は 各回とも 平面10作品、立体8作品、
パネル5点程度（大きさ等は事務局にお問合せ下さい）
- ・いずれかの出展期間をお選び下さい。一方に集中した際は、
調整させていただくことがあります。
- ・第二・三回通して展示することも可能です。
- ・搬入搬出及び展示台等は出展者にてご手配ください。

平成23年度のAACCA主催展覧会は会員及び一般の方が出展できる展覧会として開催いたします。



シドニーオペラハウス

中島昌信

カディス



そめの町で咲くのれんの華
安井建築設計事務所



SATOYAMA: 1
はやしまりこ



一
渡辺雅子



鳥
日高肇也



遊 "99
高部多恵子



フレアデス45
安河内敦子



人
小倉賢子



地の相貌（版その1）
沢口炫三



富岳・光陰
櫻井孝美



夏の終り
佐藤静子



作品 10-13
大高貞雄



カーサ・デ・オーロ
山崎輝子



O・T
小原輝子



はこぶね
村松勢津子



間（かん）
野口真理



メッシュアートチェア
山本 誠



ウップン
川原 昭



四次元の刻
神谷ふじ子



古代の詩
吉野ヨシ子



オープニング

挨拶 佐野吉彦理事
AACCA展実行委員長
司 会 安河内展覧会委員

作品紹介 櫻井孝美会員



理事会報告（主要案件のみ）

・平成23年度第一回理事会は、通常総会第五号議案にて23・24年度理事・監事の選任結果を受け、同日開催され、23・24年度協会役員が互選にて以下の通り決定した。

平成23・24年度役員 会長 中島昌信、
副会長 加藤貞雄、澄川喜一、岡本 賢、
常務理事 岩井光男、大野 勝、

・平成23年度第二回理事会は、7月20日建築会館会議室にて開催され報告に続き下記の議案が審議決定された。

- 1、2011東京aaca景観シンポジウム「東京の都市景観を考える」（10月21日開催・別紙参照）について
実行委員会より提出の、実施計画書、予算案、実施体制・チラシ案が承認され実行すること。
本年度のメイン事業として、協会の総力を挙げて会員及び一般社会へ働きかけること。
- 2、展覧会委員会委員長に村松理事を選任し、今後開催される展覧会の企画運営をすること。

新入会員・会員の移動（2011年4月～8月 敬称略）

新入会員

二井 進 〒275-8575	習志野市泉町1-2-1 日本大学	Tel.047-474-9685	生産工学部創生デザイン学科
石塚 一男 〒179-0083	練馬区平和台1-32-22	Tel.03-6766-2705	
中澤 公伯 〒275-8575	習志野市泉町1-2-1 日本大学	Tel.047-474-2484	生産工学部創生デザイン学科
藤井 仁志 〒151-0060	渋谷区西原1-16-15-406	Tel.090-3287-7133	

会員の移動

鈴木 聡 個人会員氏名変更：加藤和久 会社組織変更の為
日高 華也 個人会員住所変更：〒215-0003 川崎市麻生区高石3-6-1 ライオンガーデン百合ヶ丘1305
Tel.044-959-3307

株式会社 タカタ 法人会員住所変更：〒110-0003 台東区根岸1-2-17 住友不動産上野ビル7号館 2F
株LIXIL 法人会員社名変更：旧社名 株INAX

同 住所変更：〒110-0014 台東区北上野1-8-1 Tel.03-4335-7521

代表者名変更：営業ビルディメンタル統括部 統括部長 神谷宣夫

担当窓口変更：営業ビルディメンタル統括部ディメンタル営業部首都圏支店 支店長 野中 敦

TOTO株式会社

代表者名変更：コミュニケーション本部長 城之下 洋

担当窓口変更：コミュニケーション本部営業情報部 担当部長 江藤祐子 Tel.03-3595-9511

戸田建設株式会社

担当窓口変更：建築設計統括部設計管理部事務課課長 鈴木忠之 Tel.03-6228-8454

株式会社 佐藤総合計画

担当窓口変更：TM室代表 取締役執行役員 関野宏行 Tel.03-5611-7207

明和建材株式会社

法人会員社名変更：旧社名 日本アロフ株

会員投稿記事 募集中

会員の皆様の

作品紹介、活動報告、
展覧会、個展等のご案内
企業の広告、出品展等のご案内を
会報に掲載いたします。詳しくは
広報委員会にご相談ください。

会報について

会報へのご意見 ご希望を
お寄せください。（広報委員会）

発行 社団法人 日本建築美術工芸協会
発行人 会長 中島昌信

〒108-0014

東京都港区芝5-26-20 建築会館6階

Tel 03-3457-7998

Fax 03-3457-1598

Url <http://www.aacajp.com>

E-mail info@aacajp.com

編集

広報委員会

瀬川 秀之 石田 真人 神谷 ふじ子

竹生田 正 中村 弘子 野口 真理

山崎 輝子

事務局

